講評

学習の困難を抱える／抱えない日本語学習者はどのように宿題に取り組んでいるか

第二言語としての日本語の学習においてひらがなの学習が最初の「関門」となっていることは日本語教師のだれもが経験的に感じてきたことであるが，本研究では，ひらがな学習の遅れが後の学習に多大な影響を及ぼしていることが明らかに示された。統計的手法に加え，学習者が実際に宿題に取り組む様子を撮影し，学習の過程を立体的に描き出そうとしている点が評価できる。

「ひらがなの習得度」の指標としては聞き取った音声を文字で書くディクテーションテストの得点が使用されており，単なる文字の形の習得だけでなく，音声認識力も学習成果に関連している可能性がうかがわれる。また，ひらがなテストで低得点だったが期末テストの点数が平均以上であった学習者は，むしろ高得点者よりも効率的に学習を進めており，この学習者がどのようなプロセスで学習を成功させているかについて質的調査を縦断的に行う等して分析がなされると，実践現場への貢献につながると考える。

（京都教育大学国文学科 教授　浜田麻里）

選考委員（五十音順）

尾﨑　明人（※ 1）名古屋外国語大学国際教育連携推進機構長
国際日本語教育インスティテュート長
佐竹　秀雄　公益財団法人日本漢字能力検定協会現代語研究室 室長
棚橋　尚子　国立大学法人奈良教育大学国語教育講座 教授
浜田　麻里（※ 2）国立大学法人京都教育大学国文学科 教授
森山　卓郎　早稲田大学文学学術院 教授

※ 1 在任期間 2019 年 4 月まで　※ 2 在任期間 2019 年 5 月から